



english version at

<http://p.booklog.jp/book/72551/read>

第1章

御神(おんかみ)エホバ アミタイの子ヨナに託して曰(いわ)く 汝(なんじ)大(おお)いなる町ニネベに急ぎ行(ゆ)きて 彼(か)の悪(あ)しき民への警鐘となるべし その悪 我に挑みかからんとするなればなり されどヨナ エホバに逆(さか)らいてタルシシに向かう

『旧約聖書「ヨナ伝」第1章1節－3節』

古い話です。イエス・キリストが生まれるよりももっと昔の話。ニネベという町がありました。今はイラクのモスルとなっており、遺跡が残っています。古代アッシリア王朝の主要都市の一つで、のちに王朝最後の首都ともなります。ヨナ伝によると、その端から端まで行くには歩いて三日もかかるほどで、町というよりは立派な国というべきで、王もいましたので都市国家でもありました。

しかし、古今東西の都市がたいいそうであるようにニネベも模範的な都市とはいえませんでした。王から下層市民にいたるまで不正、腐敗、詐欺がはびこり、権力の乱用による貧富の差も広がり、その反動として暴力集団が発生し暴動が頻発していました。しかし富と暴力は互いに親

和性を有しているのに、富裕層は暴力をも配下にするようになり、かえっての富の不均衡は助長され、ついに富と暴力が正義という国家も手におえない無秩序が作り上げられていました。富に飢える武装集団は周辺地域の民族をも略奪し、その結果、近隣勢力との抗争が繰り返され、エスカレートし、敵への恐怖と憎悪が高まり、例えばニネベでは戦争の捕虜を残酷にも生皮を剥いで処刑しました。こうしてニネベの市民は神を恐れない民となり悪名を轟かせ怖れられました。

神といってもニネベの人々にとってのそれは諸々の偶像神でした。職人の手で作られた人や動物、あるいは半人半獣の形をした神像が町のそこかしこに祭られており、裕福な家には二つ三つの家庭守護神が祭られていました。このような偶像のおおかたはその神格の由来が曖昧で、中には人形芝居に使われていた人形がまわりまわって神様に祭り上げられることもありました。そのようなことは人に関しても起こり、ただの人がめぐりめぐって生き神様として崇められるようになることもありました。このような神々は、正義且つ全能という概念と無縁で、ちょうどギリシャ神話の神々と同じように、神も人間と同じように不義を犯すということが不思議なことではなく、慈愛の概念が神から剥奪されていました。

結局、多くのニネベの人は、日々見かける偶像神や生身の神は恐れるに及ばずという意識を抱くようになりました。しかし一方、権力者たちにとって市民から富を吸い上げ続け、以て自からの権力を保全するためには神々の権威の保全が不可欠でした。そこで神への畏敬の念を抱かせるべく不可思議な神話や神から授けられたとする戒律がたくさん創作され、これらが編纂され、流布され、聖典として冒すべからざるものとされました。こうして、権力の後ろ盾により、神々の神格は絶対的なものとされ、市民は金品や農産物をそれぞれの信仰する神に奉納し、神話創作者らとその共謀者らはこれらからご利益を得ました。たとえば神殿などの神像は木製の偶像を、奉納された金や銀の品々から鑄造された箔で覆って作られることが一般的であったが、権力者たちは神々からこの金箔や銀箔を盗み、また供え物から高価なものを着服しました。彼らにとって神々は文字通り金の生(な)る木というわけでした。このようなことは古今東西普遍で、その証拠

には、中国には「仏様の顔から金をはぐ」（水滸伝）、日本には「仏の顔も三度まで」ということわざがあります。こうして権力階級の高位の者ほど神への信仰は低いのが実情で、さらに、彼らは、神の権威を逆用し教義を強（し）いて、弱き者らを害し、かえって、自らの良心の声を恐れる無神論者よりも不正に走りやすくなっていました。

このように権力者たちは神々を富獲得のための道具として用いていましたので、神々への不遜や冒瀆を厳しく罰する戒律を、神々から与えられたものとして絶対視させ、違法者や冒瀆者らは重刑を以て処罰されました。しかし神々を利用した権力者たちこそ神々をより冒瀆していたといえます。こうしてニネベの人々は権力者を神よりもはるかに恐れるようになっていました。

一方、権力者たちが最も恐れたのは、市民の反乱、とくに敵国との共謀による反乱でした。そこで、市民に恐怖心を植え付け反乱を防止する目的で、かつある種の野蛮な欲望を満たせしめる目的で、敵国捕虜の残忍な公開処刑を定期的に行いました。

さて、この後者の目的のためにニネベの人々は、神を恐れないにもかかわらず、神への服従を口実とした忌むべき悪習に浸るようになっていました。それは、神に人の子を生け贄として捧げることであり、この神の名を借りた殺人こそニネベにおけるもっとも大きな罪でした。

そして、旧約聖書のヨナ伝によると、神エホバは耐えかねて劫罰を決心したが、一縷の望みをニネベに与えるべく、アミタイの子ヨナに神託を授けたのでした。しかしヨナはこれを聞きませんでした。

神託というのは、神から人へのお告げですが、王などの権力者が自らの計略として人々を行動に駆り立てるために、祭司や預言者に強要した結果の偽神託が多々あったと想像します。そうであれば、ヨナのように逃避行する預言者は珍しいことではなかったでしょう。ヨナが本当に神から逃げたのか、それとも民の悪行を正し秩序を回復しもって王家の安泰を計ろうとしたニネベ王による偽預言の強要から逃げたのか？筆者にはいずれの選択肢も捨てがたいものでしたが、ヨナの奇跡を鵜呑み、いや鯨飲することにしました。

神曰く「ニネベに最後のチャンスを与えよう。お前は預言者としてニネベに行って、人々に罪を悔い改めるように話さない。もしお前の話を聞いて悔い改めるならニネベを滅ぼさないことにする。もしそうでなければ、ニネベを抹殺する」

ヨナ「なんですって！ニネベですか？何で私を・・・ご存知でしょう、私がまだ子供の頃、父と母はニネベから攻めて来た略奪者らによって私の目の前でたたき殺されたのですよ。私はそのショックで気を失い、意識が戻ると記憶をすべて失っていました。自分の手を見てどちらが右手でどちらが左手かもわからないありさまでした。家は半分壊され、大切なものはみな持っていかれました。たくさんの若い男女が鎖にかけられ号泣しながら家畜のように連れ去られました。家畜もたくさん盗まれました。うちで飼っていたヤギもみな連れていかれました。私はみなしごになり、屋根のなくなった家を覆うように生（は）え出たイチジクの木がなかったら飢え死にしていたでしょう。だからあんな憎い人たちの住むニネベなんか行きたくありません。あんな汚（けが）らわしいところはすぐに滅ぼされるべきです。ニネベの悪党どもはあなたの造られた地に住む価値がありません。すぐに滅ぼしてください！どうぞ神様、ご存知のようにこれは私がずっと願っていたことです。それなのになぜ今私がニネベを救うために行かなくてはならないのです？」

「ニネベの民が待っている、早く行きなさい。」

「どうぞお許しを！私にはできない。ニネベに預言に行くのだけは勘弁してください。・・・そうだ、神様、私よりももっとふさわしい人がたくさんいます。ニネベに肉親を持つ預言者が何人もいます。その人たちをおやり下さい。肉親を救うために喜んで参じるでしょう。しかし私にはできない・・・他のところならどこへでも行きますから、どうかニネベだけはご勘弁を！」

「お前が最善だから決めたことだ。私は次善の者は使わない」

しかしヨナは神の言いつけを守りませんでした。ニネベとは反対の方向に逃げて行き、ヨッパという港（今のテルアビブ）に来るとそこから船に乗って地中海にいで、今のスペインあたりでしょうか、タルシシという地に逃げようと思いました。遠く水平線の果てに行ったら神から逃（のが）れられると思ったのです、人々がまだ地球は丸いということに気づいていない頃のことですから・・・ましてや回転してるなんて思いもありません。

ヨナは船底におりると、急いだ長旅の疲れのためにすぐにぐっすりと眠りこけました。しかし船が港を出てしばらくすると風向きが変わり、強い風が船を押し戻すように吹いてどんどんあらぬ方角に押しやっていきました。風は次第に激しさを増し、黒い雲が空をおおいはじめ、すぐに辺りは夕暮れのように暗くなりました。雷鳴がとどろき激しい雨も降りだしました。嵐です。波は荒れ狂い船は大きく揺れ今にも転覆してしまいそうです。

「ありや ありや ありや、大変だ一、こりやあ危ない！」 舵手

「ああ神様、助けてー！」水夫

「急いで帆を下ろせ！碇（いかり）も下ろせ！」船長が大声で叫びます。

客室にいた乗客らが甲板にびくびくしながら上がってきました。船の大揺れでろうそくの灯りがすべて消えたからです。ねずみもたくさん、彼らを追い越して甲板に上がってきて、少しでも高いところをめがけて走ります。

「みんな、自分の神様に嵐が治まるようお願いするのだ。乗客のみなさんもそれぞれの崇（あが）める神様に命乞（ご）いして下さい！」船長

船の上の人たちはそれぞれ自分の神に助けを求めました。しかし嵐は少しも弱まらず、船はギギー、ギギーと、今にも真っ二つに折れてしまいそうな音を立てています。

「神さまー、神さまー、どうかお助けくださいーい！」人々は必死で叫んでいます。

「おお、わが神、偉大なるベル様、こりゃあ、あぶのうございます。どうかこらえてつかあさい！もし生きてもういっぺん御身（おんみ）のお宮に参ることがかないまするなら、必ずレバノン杉の神殿を建てて進めますけえ！」裕福な材木商人。

「あな、ゼウスの娘子（むすめご）であられアポロのふたごの妹であられる麗しき女神アルテミス様、どうぞこの嵐を沈めてください。もし私がこの難を逃れて生き延びることがかないますならば、十頭の子牛の生贄をあなた様の宮殿に捧げましょう」賭博師。

「ああ、われらの臓腑を五穀と葡萄酒で満たされる豊穰の神であられる半魚神ダゴン様、どうぞわれらの腑が塩水（しおみず）と海藻（かいそう）でふくらまされないようお助け下さい！」料理長。

「あば、エホバ神！あなた様の御名（みな）を語った数々の罪をお許してください。」偽（にせ）預言者が船尾にて人に聞かれないようひそひそ声で祈る。「誓ってもう二度と偽りの預言はいたしません、あなたの御名においても他のいかなる神の名においても。ですからどうぞこの船とともに私を海の藻屑になさいますように！あなた様もよくご存じのとおり、私がこの船に乗ったのはまさにあのニネベ王から逃れるためです。王の家来が私を見つけ無理やりニネベに連れ戻そうとしました。今度はあなたがニネベを破壊するのだという偽預言を私にさせようと思いました。しかし私はもう悔い改めました。だからすきを見て逃げ、この船に隠れたのです。ですからどうぞお許しを！あなたの名を語って得た金はみな返しますので！」

「海王様、どうぞお怒りを静めて下さい。どうぞ、お助けを！」船長がへさきにて祈る。「われらのうちに何かあなた様のお気にさわるようなことをした者がおるのでしょうか？でしたらお教え下さい。罪を悔い改めさせますから」

「お母さん、お母さん、こわいよー、助けてー」初めて海に出た小間使いの少年船員。

「おお、バール、バール、もしこの船をどうしても沈めるのでしたら、わたくしジヨジヨめをイルカに変えてください」泳げない見習い料理人。

しかし嵐はいつこうにおさまらず、船は苦痛にあえぐ人のうめき声のような音をたててきしむ・・・いっそ真っ二つに折れてこの苦痛から逃れたがっているかのような・・・あるいは船も慈悲を求める祈り声をいずこかの女神に上げていたのであろうか。

こんなにたくさんいたのかと驚くほどおびただしい数のねずみたちがマストに上がって不安そうな鳴き声を上げている。ねずみを餌にしていた数匹のイタチまで現れて舳先に集まった。

水夫たちは船を少しでも軽くし且つ重心を下げるために甲板にあった大きな荷物を手当たり次第

に海に投げ込みます。

さて、ヨナはそのとき船底でまだ眠りこけていました。船体のきしむ音も荒いローリングも彼を目覚めさせません。

船長が提灯（ちょうちん）を片手に降りてきました。うめき声が聞こえたので、声のほうに寄ると、寝ながらうなされているヨナを見つけ、船長は驚き恐れしました。「なんとこんな揺れをもものともせずに寝ておれるとは、まさに神わざだ！しかしこの深い眠りさえも、何かしらおまえの現実の罪・苦悩を一時（いつとき）も忘れさせてくれないのか・・・哀れな人・・・もしやいずこの怒（いか）れる神がおまえを起こそうとしてこの災難を我が船に見舞っているのではあるまいか？・・・はて、わしはなぜここにいるのだろうか？・・・覚えがないぞ！・・・ありやりや！もしやこやつが神が、嵐をもものともしない強情なこいつを叩き起こさせるためにわしに憑（つ）いてここへ来させたもうたか？！」

船長はヨナの顔を平手で打って、大きな声で言いました。「これー！こんな大変なときに寝てる奴があるか！すぐにあなたの神様に嵐を静めてくれるよう祈ってくれ。あなたにも信じている神があるだろう。もしかしたら、あなたの神様がこの嵐から私たちを救ってくれるかもしれない。」

「神様？だめだ！私は祈れない・・・」ヨナ

「じゃあ、あなたには神様はいないのですか？」

「いや、いますとも、全能の神エホバです。でも私はその神様から今逃げているのです。神様を捨ててきたのです！」

「神様を捨てた？それはどういうことです？聞かせてください」

「実は三日前、神様は私にニネベに行って人々に罪を悔い改めるよう話してこいと命じました。でも私にはそれは荷が重すぎたのです。それで神様に背いて逃げているのです」

「(傍白)なんと、おまえはわしの船には重すぎる荷だ！」

「だから、私にはもう神様に祈る資格なんてないのです。」

「祈る資格がない？いやあなたは祈るべきです。あなたは神を捨ててきたと言ったが、あなたが捨てたのは神じゃなくてあなた自身です」

「(傍白)そうだ、私は、神に捨ててもらいたかったのだ！」

「それに、あなたは荷が重過ぎると言ったが、神がじかに命じられるのだからその重荷は実は軽いはず」

「その軽いはずの荷が私を金縛りにするのです。だからその荷を捨てて逃げています」

「まさにこの嵐は、そんなあなたへの神の怒りでしょう。でもあなたの神様はあなたを連れ戻そうとしているのだとしたら・・・さあ早く神様に祈ってください。祈って、ニネベに行くと申し上げるのです。許しを請うてください、あなたのために私たちの命まで危なくなっているのですから。あなたが祈らなければ、私は船長として、あなたの神様の手となってあなたを葬らねばならない！」

さてその頃、船の甲板では水夫長が細い棒の詰まった花瓶を持って現れ、大声で言いました「さ、みんな、このくじを一本ずつ引いてください。先が赤くなったくじが一本だけ入っています。

そのくじを引き当てた人がこんな嵐を呼ぶようなひどいことをした罪人（つみびと）です。」

みんな恐る恐るくじを引き始めました。というのは、かの偽預言者同様、だれもが心当たりがあって、この嵐は自分の「あの」罪のせいに違いない、と思い始めていたからです。

「ああ、やっぱりわしじゃなかったろう、ほれ、わしのくじをみんな見てつかあさい」材木商人はほっと胸をなで下ろしました。人身御供（ひとみごくう）にされる危険を知っていたからです。

「ああ、よかった。ぼくはいつもくじ運がいいから赤いやつを引き当てるかとはらはらしていたよ。でも神様はやっぱり間違いはしないもんだ、はっはっは」見習い料理人は、目に涙を浮かべながら、「パール様、パール様！」と唱え、嵐が静まるよう祈りを続けました。

「ほら、わしだってちがう、わしは無実だ・・・しかしかわいそうなわしの子、あいつは無垢（むく）の人形なのに、ならず者の船員どもが箱もろとも冷たい海に投げ捨ててしまったわい」人形使いが、目に涙を浮かべて言った。

こうしてみんなくじを一本ずつ引いていきました。しかしだれも赤いくじは引き当てませんでした。そしてくじは残りわずかとなりました。

「さあ、まだ引いてないのはだれだ。」占星術者

「私はくじを作ったので最後に引くのがきまりです」水夫長が、くじが引かれるたびにしていたように、花瓶を振ってくじ棒をカラカラいわせて混ぜました。

「ああ、そういえば船長がまだ引いていない。しばらく姿を見ないが」舵手

「それにあの最後に飛び乗ってきたけったいな旅の人もまだ引いてないぞ。」料理長

「ああ、ヨナならまだ下で眠ってますよ、ひどくうなされていって・・・おや、やっこさんやってきましたよ」 拝火教徒

そのとき、ヨナが船長に支えられながら船底から上がってきました。そして大きな声で言った。
「くじを引く必要はない、この嵐は私のせいであって、自分の神様の為せる技です！」

船長はみんなにヨナが神に背いて逃げてきたことを説明し、最後の数本のくじを引き抜き、赤いくじを荒れ狂う天に差し上げて声高に言った。「私は、この人ヨナの神様に呼ばわって尋ねる。この赤いくじのために、あなたはこの無実のくじをも海中に葬るのですか？」

しかし嵐は衰えるどころか激しさを増した。

「あっ、碇綱（いかりづな）が切れた！」水夫長

みんなはヨナを取り囲んで口々に言った。

「あなたのせいで私たちは死ぬかもしれないですよ！」偽預言者

「あなたは何者だ！」 拝火教徒

「あなたはどこから来た人だ！」 占星術者

ヨナは答えて言った。「私はガトより来ましたヘブライ人です。私は海と地を造られた天の神エホバを恐れる者です」

「あなたはなんてことをしたのです。あなたの神様に背いて逃げようなんて！」 占星術者

「おれたちまで巻き添えになるなんてごめんだぞ！」 賭博師

「この嵐が静まるには、あなたをどうすればいいのだろうか？」水夫長

海はますます荒れて、大波が一つ船べりを越え入り甲板は水浸しになった。

「私を海の中に投げ入れてください。そうしたら海は静まるでしょう。私にはよくわかっています。この暴風がこの船を襲っているのは私のせいですから。」ヨナは死を覚悟した。

しかし船員らは何とか船を陸のほうに漕ぎ戻そうと努めた。そのころは船は必ず陸が見えるところを航行していましたから、接岸できなくとも近くまで行って泳いだりボートで陸にたどり着くことが可能だからです。しかし海はますます荒れ、嵐は船を沖のほうに吹きやりました。とうとう陸も見えなくなりました。

そこで人々は神に呼ばわって許しを請い、口々に船長の決断を求めました。

船長は、着ていたコートを引き裂き、ヨナの肩を後ろから両手でつかんで、荒れ狂う天空を見上げて言った、「この人ヨナの神様、どうぞこの人のせいで私たちの命まで奪わないで下さい。私たちはこの人をあなたが造られたという海に投げ入れます。でもそれはあなたがさせることだからです。だから私たちとしては仕方のないことです。この人をあなたの手任せます。どうか私たちは助けてください。」

こう言うと、船長はヨナを前に突き出し、ヨナは海に飛び降りた。

間もなく、はるか彼方に弓なりの水平線が突如として明るく浮かび上がってき、黒い雲はそこからどンドン風に流されてゆき、荒れ狂っていた海は一変して巨大な青いじゅうたんを敷いたかのように平らになり静まった。人々は驚き、喜んで、ヨナの神を称（たた）え、感謝し祈った。

「おー、ヨナがあそこにいるぞ！」舵手が右手を伸ばしてヨナが飛び降りたのとは反対側の右舷の海域を指し示しました。

見ると遠くでヨナがプカプカと漂っています。船から投げ捨てられた人形使いの木箱からこぼれ出た木人形につかまっている。

「おーい、ヨナは無事だぞ、助けに行こう！」舵手

「(傍白)助けるとまた嵐が戻ってきはしまいか？」各々

「ボートをすぐに下ろすんだ！」船長

「おい、ヨナー、今助けに行くからがんばってろよー」水夫長

ヨナからは声が返ってこない。

ボートに船長が真っ先に乗り込み、体格のいい二人の船員が続いた。三人はヨナの方にめがけてボートを一心に漕いだ。そして石を投げたら届きそうなところまで来たときのこと、

「あっ！船長、何か大きなものがやってきます！気を付けてください！」マストに上った船員が指さしながら叫んだ。

みるとヨナのかなたに浮き沈みしながら勢いよく近づいてくるものが見えます。

「なっ、なんならー?!」材木商人

「あの大きな波、灰色のものが見えるぞ！」料理長

「ものすごい速さでやってくるぞ！」占星術者

「船長、気をつけてください！」 舵手

ボートの三人は振り向いて舵手が指差すほうを見た。大きな白いうねりが上下しながら近づいてくる。

「あれはダイオウイカだ！ 白い」 人形使い

「いや、あれは鯨だ」 占星術者

「あっ、口を開いた。ヨナが食べられるぞ！」 料理長

「やられたー！ひとのみだ！」賭博師

「あっ、潮を吹いたぞ！やはり鯨だ」拝火教徒

「この野郎、これでも食らえ！」立ち上がった船長は、こう叫びながらボートにあった長い鉤竿（かぎざお）を投げつけた。それは弧を描き、巨大な海獣の大きなひたいをかすり、その白い皮膚に赤い筋をにじませた。

それに立腹したせいかどうか獣は大きく身をくねらせ、白い尾ひれでボートをすくい、宙高く放り上げた。三人は悲鳴をあげながら海中に落下し、しばらくは浮かんでこなかった。

転覆したボートのそばから三人が浮かび上がったとき、獣は虹色の潮を噴き上げ、泳ぎ去ろうとした。

「船長、大丈夫ですか?!」 舵手ら

「やい、人喰い鯨め！」 船長がボートにつかまって叫んだ、「もしお前が神の使いだというのだったら、そのしるしを見せろ！」

白い鯨は片方の目で船長を一瞥すると静かな海面を分けて泳ぎ去っていった。

「あれが、彼の運命だったのだ、神に背いた預言者ヨナの。なんと恐ろしい！」偽預言者が震える声で言う。「(傍白)しかしヨナよ、あなたは本当に神の声を聴いたのか？それでも逃げたのか？」

第2章へつづく

<http://p.booklog.jp/book/88951/read>